

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

A Study of Comparison in the Seniors' Discourses  
in the Scene of Request at Four Locations in  
Kyushu : Discourse Feature and Distribution  
about Consideration Express and Active  
Linguistic Behavior in Kyushu Dialect

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 美香, MATSUDA, Mika メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003090">https://doi.org/10.15084/00003090</a>

## 九州 4 地点の依頼談話における配慮表現と積極的言語行動

——九州における方言談話の特徴と分布——

松田美香

別府大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

井上 (編) (2014) は、電話による 4 つの場面のペア入れ替え式ロールプレイ会話で、首都圏の高年層と若年層の談話比較を行った結果と分析である。調査は日本各地で行われたが、本研究ではその中の九州 4 地点の高年層ペアの依頼談話を比較した。その結果、談話構造は A の依頼→B の断り→A の説得(→B の事情説明→A の説得)→B の受諾→A あるいは B の調整→A の対人配慮・念押しと、ほぼ共通していることがわかった。構造内部の「依頼の話段」の中で A がどのような配慮表現をするか、「説得の話段」では B に受諾させるための提案や再度の依頼をするか否か、そして、全体的に配慮や念押し等の言語行動、定型表現の使用についても比較した。その結果、都市性の比較的高い熊本県熊本市・鹿児島県 (日置市他) では、「配慮性」につながる特徴が優勢で、都市性の低い大分県 (由布市)・熊本県人吉市では、「積極性」につながる特徴が優勢であることがわかった。依頼談話におけるこのような特徴の分布は、「働きかけに対する姿勢」の異なりを明らかにしたといえ、地方発の方言文法現象等の発生のしくみを解明する手掛かりになると考える\*。

キーワード：依頼談話、話段、都市性、配慮、積極性

## 1. 方言談話の先行研究と本研究の目的

### 1.1 先行研究について

#### 1.1.1 談話特徴の地域差の発見

県民の性格や印象としてなんとなく感じていた「話し方・話のもっていき方」の違いが、方言学的に証明できる段階に入った。方言が談話レベルにおいても地域差を呈していることを、沖 (1993) は全国調査された、祝言に答える側の談話比較から指摘した。ゆるやかな差であることを前提に、西側は描写的な、東側は感情吐露的な喜びの表現の仕方の特徴差が見られるとした。また、沖 (2014) は『方言文法全国地図第 6 巻資料一覧』のデータを使用して、待遇度の高い相手への依頼表現について分析している。その結果、授受形式の使用頻度の高さと種類の多さや、クレル/クダサルは東日本のほうが使用率が高いということなどを明らかにした。また、英語と

\* 本稿は日本語学会 2017 年度秋季大会での口頭発表「大分方言談話から見た配慮表現の世代差と地域差」を経て修正・加筆したものです。これまでに多くのご助言・ご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。また、本調査にご協力いただいた皆様にもこの場をお借りして感謝申し上げます。なお、本稿は国立国語研究所の萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」(2010 年 11 月～2013 年 10 月 プロジェクトリーダー：井上文子)、基幹型プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(2009 年 10 月～2016 年 3 月 プロジェクトリーダー：大西拓一郎)、基幹研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(2016 年 4 月～ プロジェクトリーダー：木部暢子) の研究成果です。また、JSPS 科研費 24520500 (代表者：杉村孝夫)、同 25370539 および同 17K02801 (代表者：井上文子)、同 15K02584 (代表者：松田美香) の助成を受けています。

異なり、「くれる」の可能形が使われないという、全国各地に共通して見られる発想法を明らかにした。久木田（1990, 2010）は、自然談話を使って説明の場面の談話展開について調べ、接続詞や文末表現の特徴から、東京の話者は「主観直情型」、関西の話者は「客観説明累加型」、また愛知県方言話者は「理由づけ説明型」と名付けた。沖（1993, 2014）の全国的な調査ではあるが比較的短い談話を対象とした調査研究と、久木田（1990, 2010）の各地の自然談話をある程度長い時間切り取って対象とした調査研究とは、それぞれ資料上の違いがある。その後、両研究に牽引される形で、各地でさまざまな規模の談話調査が行われるようになってきている。

### 1.1.2 地域差や社会学の視点から方言談話を見る

先行研究の談話の特徴や展開法が明らかにしているのは地域差であり、より多くの地域の特徴を比較することによって地域同士の関係が明らかになってくる。それが方言区画論や方言形成論へとつながっていることは論を俟たない。従来の方言区画論には諸説あるものの、おおむね東西で2区分するものが多い。

沖（1993）もこの区画論に沿った結論であり、小林・澤村（2014）も、西日本と東日本とでは「ものの言いかたの発想法」が異なっていると述べている。西日本は定型表現が盛んであり、加工性や客観性の方向に発達しているのに対して、東日本はオノマトベが盛んに使われ、直接性や主観性の方向に発達しているという。また、東西差だけでなく、挨拶や買い物時のことばについては、定型性の低さや配慮性の弱さに周囲論的の分布も見られると述べている。小林・澤村（2014: 170）の「言語的発想法の発達状況から見た四つのグループ」では、九州、東北を除く東日本地域、沖縄地方が「準未発達地域」となっている。東西差があるだけでなく、九州地方は、西日本の特徴と周辺部の特徴を併せ持っているという位置づけである点が注目される。

談話とともに研究され始めた分野として、言語行動がある。西尾（2012）は、相手から利益を受けた際の言語行動の調査研究を行い、談話分析の手法である機能的要素を用いて、特徴を抽出した。その結果、東北・関西・九州等の地域ブロックのまとまりよりも、コミュニティ密着度の低さや都市性の高さに強い相関が見られ、福岡は密着度高で都市性低、また、女性は非都市部的（機能的要素が多い）、男性と若い世代は都市部的（定型使用が多い）という結果を得ている。談話における特徴においては、地理的な連続性よりも社会的な要素による方言区画が考えられるということであり、方言形成についての示唆に富む結果であるといえよう。

### 1.1.3 働きかけのある場面の方言談話調査

方言談話研究をする際に資料を自然談話から得るとすれば、膨大なデータ量が必要とされるだろう。異なる多くの地点との比較に耐えうる等質な資料を集めることはきわめて難しい。杉村（2013）は、大分県の7地点3世代の場面設定の膨大な談話資料から21話分のさまざまな依頼の場面を抜き出して、発話機能とコミュニケーション機能を抽出した。一方、井上（編）（2014）は、電話による「文句」「依頼」「慰め」「勧誘」の場面のロールプレイ会話の調査を全国11地点で実施し、そのデータを使用して首都圏の高年層と若年層の比較を行ったものである。ロールプレイ

という手法の調査は、話者の条件はもちろん、話者の「発話意図」を統一することができ、分析単位である「発話機能」を認める作業が容易になるという点で優れている。この手法については、話者の発話の不自然さや演技の可能性が指摘されることもあるが、井上（編）（2014）では話し相手が親しい知人・友人であることや、自宅や近くの公民館で録音することにより、不自然さはほとんど感じられない。自然談話と近似した資料が得られていると考えてよいだろう。

## 1.2 本研究の目的と概要

そこで、本研究では、統一された条件でペア入れ替え式ロールプレイ調査を行った井上（編）（2014）の九州4地点の方言談話資料を用いて、九州各地の依頼の場面における方言談話の特徴の違いを明らかにし、その特徴の分布と方言敬語等の分布とを重ね合わせて、九州の方言形成を考えてみたい。具体的には、大分県、熊本県熊本市、熊本県人吉市、鹿児島県の「依頼」の場面の方言談話資料を用いて、方言談話の特徴にどのような差が見られるかを調べる。

以下では次のような順序で考察を行う。

- ・九州4地点の依頼談話の談話構造とコミュニケーション機能の特徴
- ・九州4地点の配慮表現と積極的言語行動
- ・依頼談話の特徴から見る九州4地点の談話特徴の分布
- ・まとめと課題

## 2. 九州4地点の依頼談話の談話構造とコミュニケーション機能の特徴

### 2.1 資料の概要

井上（2015）に本研究で扱う談話資料についての調査概要があるので引用する。

方言談話を分析するには、自然談話を対象とするのが理想的ではあるが、自然談話は、話者の属性はある程度統一できても、場面や話題がさまざまであり、単純には比較することが難しい場合が多い。そのため、場面をそろえることが可能で、発話の意図や話の流れが比較しやすいロールプレイ会話を利用することにした。ロールプレイ会話は、役割を演じるという仮想の会話ではあるが、使用する表現や話の展開を話者自身が考えるため、実際の言語運用に近い会話が得られると考えた。

調査は、「依頼」「勧誘」「出欠確認」「申し出」等の場面を設定し、電話をかけるという方法で、その状況での会話を親しい同性の友人同士で実演してもらった（ペア入れ替え式）。（中略）

- ・調査実施時期：2011年11月～継続中（2015年当時：筆者注）
- ・調査地域：首都圏、関西、秋田、愛知、相生、広島、大分、熊本、人吉、沖縄
- ・話者：高年層男、高年層女、若年層男、若年層女
- ・会話の種類：ペア入れ替え式ロールプレイ会話4場面（後略）（井上2015: 100-101）

この引用文では、九州地方の調査地域が大分、熊本、人吉と市名で記載されているが、後に鹿

鹿島が追加された（2015年9月）。本研究では、図1の(1)大分、(2)熊本県熊本市、(3)熊本県人吉市、(4)鹿児島島の4地点を比較する。なお、(1)は大分県由布市、(4)は鹿児島県日置市他の出身者による調査結果である<sup>1</sup>。

各市の特徴を表1に示す。調査地点のうち熊本市は県庁所在地、鹿児島県日置市は、県庁所在地である鹿児島市のベッドタウン、大分県由布市と熊本県人吉市は農林業を主な産業とする。参考までに、人口（2015年度各市発表の推計人口）・人口密度をあげた。人口密度では、熊本市が最も高く、他の3地点は鹿児島（日置市他）、人吉市、大分（由布市）の順に低くなる。どの地点も、熊本市とは大差がある。

次に、この調査の「依頼」の場面のロールカードについての説明を井上（2015）から引用する。

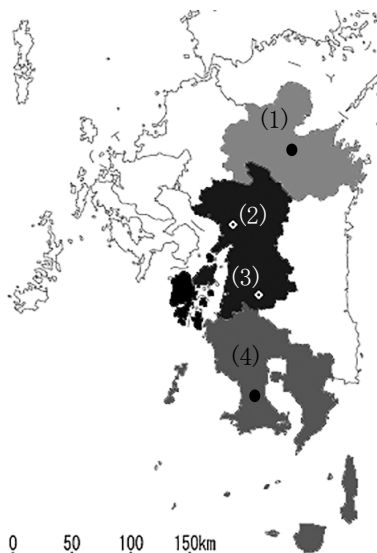


図1 九州4地点の地図

## 場面2 [A → B] 頼む

**[A への指示内容]** 日曜日に自治会（職場・親睦グループ等）／ゼミ（サークル・親睦グループ等）の集まりがあるのですが、所用で出席できなくなりました。Bさんに電話をかけ、代わりに出席してくれるよう頼んでください。断られても説得してください。

**[B への指示内容]** Aさんから電話がかかってきます。Aさんの持ちかける用件をいったんは断ってください。Aさんは説得してくるので、適度なところで了解してください。

（井上 2015: 101）

表1 九州4地点の各市の概要 各市の公式HPの記載情報（平成27年度分）より

地点番号	地点名	市の特徴	人口（人）	人口密度（人/km <sup>2</sup> ）
(1)	大分県由布市	観光・農林業	33,687	105.5
(2)	熊本県熊本市	県庁所在地・政令指定都市	739,541	1894.7
(3)	熊本県人吉市	観光・醸造・農林業	33,980	161.4
(4)	鹿児島県日置市	鹿児島市のベッドタウン・製造業	49,163	194.3

上記のロールカードをそれぞれA役・B役に渡して、日常生活と変わらぬように会話してもらった音声を書き起こした。本稿は、それらを資料とする。表2は各地点の高年層のデータ規模である。

<sup>1</sup> 大分県は男女ペアとも、ゆふし由布市内の出身者。鹿児島県は、男がひおきし日置市とかせだし加世田市（現南さつま市）、女がいぶさし大島郡といぶさし指宿市の出身者。

表2 データ規模（発話者数・場面数・データ時間）

地点番号・地点名	発話者数	場面数	各地点のデータ時間 分：秒 (依頼談話分の女／男)
(1) 大分（由布市）	4人（男女2人ずつ）	4	19:48 (2:23 / 1:56)
(2)（熊本県）熊本市	4人（男女2人ずつ）	4	16:15 (2:01 / 1:22)
(3)（熊本県）人吉市	4人（男女2人ずつ）	4	10:34 (1:52 / 1:05)
(4) 鹿児島（日置市他）	4人（男女2人ずつ）	4	19:42 (3:09 / 2:23)

以降は、地点名を、表2の（ ）内を省略して、(1) 大分、(2) 熊本市、(3) 人吉市、(4) 鹿児島と表記する。

九州3地点（鹿児島を除く）のテキストと音源は、次のHPから視聴することができる。

「方言ロールプレイ会話データベース」<http://hougen-db.sakuraweb.com/rp/>

なお、鹿児島の高年層については、今後追加の予定である。

## 2.2 九州4地点の依頼談話の談話構造の比較方法

ロールカードには話す順序の指定はなく、どのように依頼するか、どのように断り、どのように説得し、どのように了解するかはそれぞれAとBに任されている。4地点の談話構造を比較する方法として、ザトラウスキー（1993）の「話段」という単位を用いる。「依頼」の場面の談話構造を分析するためには、いわゆる「発話機能」単位では小さすぎて比較が難しい。そこで、「話段」という単位を利用することにした。

「話段」は、ザトラウスキー（1993）で新たに設定された単位である。

「話段」とは、一般に、談話の内部の発話の集合体（もしくは一発話）が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区別される部分である。（ザトラウスキー 1993: 72）

「話段」は、一人の話者の「実質的な発話」によって作られるものではなく、二人の参加者の複数の「相づち的な発話」と「実質的な発話」がまとまることによって作られる。（ザトラウスキー 1993: 75）

「話段」を把握することによって、内容上のまとまりが可視化でき、談話の構造が把握しやすくなる。電話での談話は、通常、用件に入る前の「開始部」と後の「終結部」が存在する。そして、それらに挟まれる、用件についてのやりとりが行われる「主要部」がある。この大きな枠組には電話特有の発話があるので今回は触れず、「主要部」の中に「話段」を認定することによって、主要部内の構造の比較をすることにした。

## 2.3 話段の認定について

「話段」を認定するには、「実質的な発話」と「相づち的な発話」を判別する必要がある。その



際に「発話機能」あるいは「行為的機能」という発話の最小単位による判別方法がとられる。

山岡（2008）では、「発話機能」を以下のように定義している。

話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの  
（山岡 2008: 2）

本研究では、それらを参考にして定めた井上（編）（2014）の「行為的機能」を用いる。「発話機能」の種類については、ザトラウスキー（1993）の12種類+注目表示11種類や熊谷（1997）で分析の際に用いた12種の観点のうちの1つ「行為的機能」があるが、井上（編）（2014）ではそれらを参考にしながら、簡便にラベリングができるように工夫したものを「行為的機能」としている。具体的には、「情報要求」「行為要求」「注目要求」「陳述・表出」「注目表示」「関係づくり、儀礼」「宣言」の7種である。本研究でもこれを用いる。

「依頼」の場面でのAは「Bに依頼をし、受諾させること」に向かって、Bは「断ること、後に受諾すること」に向かって、お互いに発話を積み重ねていく。その際にザトラウスキー（1993）の「実質的な発話」にあたる、情報提供に関する発話機能を用いる側（会話の主導権を持つ側）を見ていくことで、話段の区切りと内容を決定することができる。本稿では、それぞれの談話にどのような話段があるのか、また話段と話段の関係や進み方を見ることで、談話の構造を明らかにしようとした。

## 2.4 「話段」による談話構造の比較

「依頼」場面の高年層・同性同士の談話一大分、熊本市、人吉市、鹿児島の高年層同性ペア（男性ペア、女性ペア）各1組による一を「話段」を用いて比較した。その結果、「依頼の話段」、「断りの話段」、「説得の話段」、「受諾の話段」、「調整の話段」、「対人配慮・念押しの話段」の場合と、「調整の話段」が入らずに「対人配慮・念押しの話段」で終わる場合があった（表3・図2）。受諾後に「調整の話段」が入る場合は、調整をAの主導権で行うか否かでおよそ二分される。大分・男、熊本市・女、鹿児島・女は、Aが調整から念押しまでAの主導権のまま進めるのに対し、大分・女、人吉市・女、鹿児島・男は、調整をBの主導権のまま進め、最後にAが対人配慮・念押しを行っている。鹿児島・女の談話構造は比較的複雑であるが、受諾までの間にBの「事情説明」と再度Aの「説得」が入っているだけで、受諾後の展開は大分・男、熊本市・女と同じである。

熊本市・男と人吉市・男は、受諾の後に調整を行わない。しかし、説得の話段の中ですでに開始時刻をAが伝えている。このように見ていくと、「依頼」場面の談話構造の差は、受諾後の調整をAとBのどちらが行うかの違いだけであり、談話構造として重要な差はないと考える。

表3と図2から、次のような共通した依頼談話の構造をまとめることができる。

Aの依頼 → Bの断り → Aの説得（ → Bの事情説明 → Aの説得）  
→ Bの受諾 → AあるいはBの調整 → Aの対人配慮・念押し

調整を A と B のどちらが行うかの地域差・性別差は、今回の調査からは見出し得なかった。

表3 九州4地点の依頼の談話構造比較（高年層同性ペア）2011～2015年調査

話段 (主要部)	大分		熊本市		人吉市		鹿児島		会話の主導権
	男	女	男	女	男	女	男	女	
依頼	○	○	○	○	○	○	○	○	A
断り	○	○	○	○	○	○	○	○	B
説得1	○	○	○	○	○	○	○	○	A
事情説明								○	B
説得2								○	A
受諾	○	○	○	○	○	○	○	○	B
調整B		○				○	○		B
調整A	○			○				○	A
対人配慮・念押し	○	○	○	○	○	○	○	○	A

「A：依頼」—「B：断り」—「A：説得1」（共通）— それぞれ下段 a, b, c に続く

a. 「B：受諾」—「A：対人配慮・念押し」…熊本市・男，人吉市・男

b. 「B：受諾」—「A：調整・対人配慮・念押し」…大分・男，熊本市・女，鹿児島・女

c. 「B：受諾・調整」—「A：対人配慮・念押し」…大分・女，人吉市・女，鹿児島・男

図2 九州4地点の依頼の談話構造のまとめ（「主導権を持つ話者：話段」）

## 2.5 「説得の話段」における機能的要素の比較

表3の「説得の話段」とは、AがBに断られた後も依頼事を受諾するように説得する話段である。依頼談話の中で、Aが最も強くBに働きかけることが予測される話段であることから、この話段で使われる機能的要素を比較することで、各地の働きかけの特徴をとらえることができると考えた。そこで、以下では4地点の「説得の話段」の表現を見ていく。

「機能的要素」とは、会話の主導権を持つ側の、働きかけ（たとえば「依頼」）における機能を、より具体的にラベリングしたものである。たとえば、井上（編）（2014）の依頼談話での首都圏・女Aの「Bちゃん、出てくれる↑。」という発話は、Aが会合に都合が悪くて出られないという発話に続いて発せられたもので、それに応じてBは「んー、そうだねー。どこー↑、場所。」と場所を尋ねている。このやりとりから、Aの「Bちゃん、出てくれる↑。」は「行為要求」の発話であると判断する。さらに、Aの代わりに会合に出るように依頼しているという内容であることから、この発話の具体的な機能は、《代理の依頼》である（機能的要素を《 》に入れて示す。以下同じ）。このような手順を踏んで、いくつかの機能的要素を認定した。

熊谷・篠崎（2006）では、「依頼」の場面の依頼側の働きかけを分析するために、いくつかの機能的要素をまとめた「コミュニケーション機能」を設定している。それは、「状況説明」「行動



の促し」「効果的補強」「対人配慮」「その他」の5つである。本稿ではこれを参考にして、「説得の話段」の中の機能的要素を「状況説明」「行動の促し」「効果的補強」「その他」の4つにまとめることにした(表4)。なお、「対人配慮」は該当する機能的要素が見つからなかったため、表から外している。

まず「状況説明」は、Aの状況を説明したり、依頼をすることになった事情を説明したり、依頼の日時や何をするかを説明している内容の機能的要素をまとめたもの、次の「行動の促し」は、再度の依頼や依頼を引き受けてもらうための障害となっていることへの代替案を提出したり、変わってもらったら助かるという自分の思いを表明したりしている機能的要素をまとめたものである。《再度の依頼》といった直接の働きかけはもちろんだが、《受諾後の恩恵表明》等もAがBの行動に及ぶ言及をしているのでここに含めた。「効果的補強」は、直接的にはBの受諾に働きかけるものではないが、受諾できる相手の能力があることを請け負ったり、途中からAが出席できること等の条件の緩和を伝えたり、参加費用をAが持つ等の補償を表明したりする機能的要素をまとめたものである。「その他」は、Bに相談として持ち掛ける発話や困惑の気持ちを表明する機能的要素をまとめたものである。

表4 九州4地点の依頼の談話「説得の話段」における機能的要素の比較  
(高年層同性ペア) 2011～2015年調査

コミュニケーション機能	機能的要素 (A側)	大分		熊本市		人吉市		鹿児島	
		男	女	男	女	男	女	男	女
状況説明	《事情説明》			○			○	○	○
	《依頼理由の説明》					○		○	
	《依頼内容の説明》		○		○				
	《依頼時間の説明》	○				○		○	
	《開始時刻の通知》			○					
	《当日の強調》								○
行動の促し	《代替案の提出》								○
	《踊り練習欠席の勧め》								○
	《相手予定変更の提案》						○		
	《代理の再依頼》	○					○		
	《相手予定変更の依頼》		○						
	《相手予定変更の希望》		○						
	《受諾後の恩恵表明》	○					○		
効果的補強	《相手能力の評価》								○
	《相手適任の請負》			○	○				
	《相手適任の説明》			○					
	《遅れて出席の意向》					○			
	《補償の表明》		○						
その他	《相談》						○		
	《困惑の表明》						○		

表4を見ると、「状況説明」には各地点とも1つ以上の機能的要素がある。しかし、「行動の促し」には、熊本市・男女と鹿児島・男にこの要素がない。「行動の促し」とは、直接的にBに受諾を働きかける機能であり、Bの行動に言及するという特徴を持つ。熊本市・男女と鹿児島・男の発話に「行動の促し」の機能的要素があらわれないということは、これらの地点は積極的な働きかけの要素を使用しないということを示唆している。(ただし、これは調査した限りの資料において、傾向としていえることであって、その地点の特徴としていうことができるかどうかは、さらなる資料と分析の積み重ねが必要である。)一方、「行動の促し」があらわれない熊本市・男女では、「効果的補強」の機能的要素があらわれ、逆に、「行動の促し」があらわれる大分・男と人吉・女では、「効果的補強」の機能的要素があらわれない。つまり、「行動の促し」と「効果的補強」が相互に補う関係になっている。ただし、鹿児島・男のように、「行動の促し」も「効果的補強」もあらわれない地域や、大分・女、人吉市・男、鹿児島・女のように両方の要素があらわれる地域もある。

### 3. 九州4地点の配慮表現と積極的言語行動

談話構造、話段、話段中のコミュニケーション機能と機能的要素を見てきたが、ここではそれぞれの具体的な言語形式を見ながら、各地の談話の特徴を考えていく。

#### 3.1 「依頼の話段」を中心としたAの依頼表現における配慮表現

「依頼の話段」などにおいて、AからBへ依頼の働きかけをしている発話を抜き出して比較し、敬語形式や受益表現の有無、《依頼の予告》や《恐縮の表明》等の配慮に関する機能的要素が使われているかどうかを調べた。(1)～(12)は各地点の発話である。以下の用例では、比較の対象部分に下線を引く。

- (1) なんとか一代わりー、行っちくれめーかなー。(大分・男)
- (2) 勝手なことやけど、あんた行ってくれんかなー。(大分・女)
- (3) Bくん、ちょっと代わりに出てもらうわけいかなだろかー。(熊本市・男)
- (4) あのね、ちょっとね、お願いがあるとたいね。(熊本市・女)《依頼の予告》+敬語使用(お願い)
- (5) Bちゃんにね、代わりに出てもらえないかなーと思って電話したったいね。(熊本市・女)《依頼希望の表明》
- (6) Bちゃんのほうはどうか、どぎゃん↑。(熊本市・女)《相手都合の尋ね》
- (7) おまえ、なんとかかできんや。(人吉市・男)
- (8) Bさん、急に、ごめんばってんたい。(人吉市・女)《恐縮の表明》
- (9) Bさん、い、行ってもらえないかな。(人吉市・女)
- (10) 今日ちょっと頼んがあっせー、ほらー、うん。電話したんだけどー。(鹿児島・男)《依頼の予告》

- (11) B君が都合が良ければ一、ちょっと代理をお願い出来んかなーっと思って一、うん。(鹿児島・男)《依頼希望の表明》+敬語使用(お願い)
- (12) 代わりに一、婦人部長さんに出席してもらおうかなーと思っただけど、Bさん今日なんかある一↑。(鹿児島・女)《依頼希望の表明》《相手都合の尋ね》

熊本市・女と鹿児島・男では、自分の思いの描写をするだけの、間接的に働きかける(5)「Bちゃんにね、代わりに出してもらえないかなーと思って電話したったいね。」や(11)「B君が都合が良ければ一、ちょっと代理をお願い出来んかなーっと思って一」という《依頼希望の表明》を使っている。ただし、どちらも先に(4)「お願いがあるったいね。」や(10)「頼んがあっせ一、」という《依頼の予告》があり、すでに依頼が伝わっているために直接的な依頼表現を避けたとも考えられる。熊本市・女と鹿児島・女は、(6)「Bちゃんのほうはどうか、どぎゃん↑。」や(12)「Bさん今日なんかある一↑。」という《相手都合の尋ね》によって、BがAの依頼を察するよう仕向けている。これも間接的な働きかけである。

配慮の機能的要素や敬語表現や受益表現が多いほど、AがBへの言語上の配慮をしていることになるだろう。(1)～(12)を見ると、最も配慮の多いのは、(4)の《依頼の予告》をし、そこに敬語形式もあり、また、(5)の《依頼希望の表明》とその中の受益表現や(6)の《相手都合の尋ね》のある熊本市・女である。次は、やはり(10)の《依頼の予告》、(11)の《依頼希望の表明》とその中に敬語表現がある鹿児島・男と、(12)の《依頼希望の表明》とその中に受益表現があり、同じく(12)の《相手都合の尋ね》がある鹿児島・女であり、その次は(8)の《恐縮の表明》と(9)に受益表現がある人吉市・女である。大分・男の(1)と大分・女の(2)、熊本市・男の(3)は受益表現が認められるだけであり、人吉市・男の(7)には配慮の要素があらわれない。これを示すと図3のようになる。

熊本市・女：《依頼の予告》、《依頼希望の表明》、《相手都合の尋ね》、敬語形式、受益表現
鹿児島・男：《依頼の予告》、《依頼希望の表明》、敬語形式
鹿児島・女：《依頼希望の表明》、《相手都合の尋ね》、受益表現
人吉市・女：《恐縮の表明》、受益表現
大分・男、大分・女、熊本市・男：受益表現のみ
人吉市・男：なし

図3 「依頼の話段」中のA(依頼側)の配慮の要素比較

### 3.2 「依頼の話段」以外のAの敬語表現

#### 3.2.1 方言敬語

九州には、～(ラ)ス、～ナス、～ナル、～ンサル、～モス等の方言敬語があることが、以前から指摘されている。それらの語形が本資料にどのようにあらわれているかについて見ると、九

州4地点の全談話中、方言敬語と思われるものがほとんど見つからなかった。人吉市・女の(13)「言いやる」と(14)「言いなる」という第三者尊敬表現が見つかったのみである。人吉市では、伝統的な方言敬語が使用されていることがわかる。以降の例文には、適宜、発話の後の〔 〕に共通語訳を載せる。

- (13) も、行かれんなら、誰かに絶対頼んでくれーて言いやいもんでー。〔も、行けないなら、誰かに絶対頼んでくれてお言いなものだから。〕(人吉市・女)《事情説明》
- (14) (代わりば絶対) うん、出せって言いなもんで。〔(代わりを絶対) うん、出せってお言いなものだから。〕(人吉市・女)《事情説明》

### 3.2.2 共通語の丁寧語

次に、共通語の敬語がどのくらい使われているか見てみよう。共通語の敬語では、丁寧語の「です・ます」が使われているが、同性の友人同士ということでそれほど多くはなく、ほとんどが《恐縮の表明》と《依頼の念押し》の表現の中である。《恐縮の表明》は3.3で、《依頼の念押し》は3.4で扱うため、ここではそれ以外の丁寧語使用例を示す。鹿児島・男に2例、熊本市・女、人吉市・女、鹿児島・女に1例ずつあった。いわゆる共通語の尊敬語の形式は見られない。

- (15) あの、時間と場所がね、はっきりしたらね、もう一回、わたし連絡いれまーす。(熊本市・女)《詳細情報通知の請負》
- (16) 恩は忘れませーん{笑}。(人吉市・女)《恩恵の表明》
- (17) あの一、今一、誰かに、連絡しときますから。(鹿児島・男)《連絡の約束》
- (18) 日曜日にですねー、自治会のまた集まりがあるわけよー。(鹿児島・男)《事情説明》
- (19) あの、習う人にはまたほら、後日一、ちょっと、踊りを指導してもらって、もうね、毎年同じ踊りだからすぐ覚えるよ。伊集院音頭でしょう{笑}。(鹿児島・女)《踊り練習欠席の勧め》

### 3.2.3 受益表現

次に、広い意味での敬語に含まれる受益表現の発話を示す。

- (20) ちょこっと、ちょこっと行ちく、くるっといんじゃがな一。(大分・男)《受諾後の恩恵の表明》
- (21) あの、代わりに、あの一、出てもらって、あんた行ちくくれよ一。(大分・女)《依頼の念押し》
- (22) あんたに一、いろーいろとなんでも教えてもろーちよってから、お金はいいけどな。(大分・女)《補償の表明》《恩恵の表明》
- (23) こぎゃんだったよーって教えてもらうと、さがなほ、わたしほら、あなたが聞いたけんでゆってみんなに連絡すれば良かでしょ↑。(熊本市・女)《依頼内容の説明》

- (24) うん、だけん、あの、な、あなたのそのままの状態で、行ってもらおうと良かとぼってん。(熊本市・女)《依頼内容の説明》
- (25) 午前中でちゃ良かで一、に、2時間ばか、おまえがいたて<sup>2</sup>、おが代わり、やとってくれば、助かっとぼってん。(人吉市・男)《受諾後の恩恵の表明》
- (26) なーんとかいたってくれれば、助かっとぼってんが。(人吉市・男)《受諾後の恩恵の表明》
- (27) そう思ぼってんが、いたとってくれー、朝のうちだけ。(人吉市・男)《依頼の念押し》
- (28) 顔はとにかく出してくれちゅーことやったとな。(鹿児島・男)《依頼理由の説明》
- (29) もうせめて、婦人部長さんに、ちょっと代理で行ってもらわないとー、自治会としても、ちょっと決められないと思うのよねー。(鹿児島・女)《事情説明》

先に見た3.1「依頼の話段」の熊本市・男に(3)「ちょっと代わりに出てもらうわけいかならかー。」、人吉市・女に(9)「行ってもらえないかな。」があるので、全地点に受益表現が見られることになる。男性に「～てくれる」が多く、女性に「～てもらおう」が多い傾向が見られるが、性差といえるかどうかはわからない。

### 3.3 対人配慮の言語行動

2.5で紹介した「コミュニケーション機能」のうちの「対人配慮」は、「依頼」の場面の談話ではBが受諾した後の話段中に多いが、それ以外においても観察される。

- (30) んな一、悪いけどー、頼むわ。(大分・男)《恐縮の表明》《依頼の念押し》
- (31) ほんなごめんなー。(大分・女)《恐縮の表明》
- (32) 急に頼んでごめんなさい。(大分・女)《恐縮の表明》
- (33) 申し訳ないけどー、忙しいところ。(熊本市・男)《恐縮の表明》
- (34) すいませんねー。(熊本市・男)《恐縮の表明》
- (35) そう、うーん。ごめんねー。あのね、ちょっとね、お願いがあるとたいね。(熊本市・女)《恐縮の表明》《依頼の予告》 = (4)
- (36) ちょっと、か、気の毒かとぼってんたい。(熊本市・女)《恐縮の表明》
- (37) うん。ごめんね。(熊本市・女)《恐縮の表明》
- (38) はいはい、どうもー。(人吉市・男)《了解》《謝辞》
- (39) ほんな、すいませーん。よろしくお願いまーす。(鹿児島・男)《恐縮の表明》
- (40) {笑}ごめん。いつもいつもすんません。お世話になります。(鹿児島・男)《恐縮の表明》《恩恵の表明》
- (41) ほんと悪いけど。(鹿児島・女)《恐縮の表明》
- (42) ごめんねー。そしたらお願いしますー。(鹿児島・女)《恐縮の表明》《依頼の念押し》

<sup>2</sup> (25) (26) (27) の「いたてー」「いたってくれれば」「いたとってくれー」の「いたる」は、木部(2014)によると、「戻ってくることを前提として目的地に到達すること」を意味している。

人吉市・男の(38)「どうもー。」という《謝辞》と思われる発話以外はすべて《恐縮の表明》である。「ごめん」が最も多く、「すみません」や「すんません」等は熊本市・男と鹿児島・男に、「ごめんなさい」は大分・女にある。「気の毒か」(熊本市・女)と「申し訳ない」(熊本市・男)はそれぞれ1例である。人吉市では男女ともに《恐縮の表明》がなく、どちらもBが受諾した直後には、人吉市・男が(27)「いたとつてくれー、朝のうちだけ。」、人吉市・女が調整の後で(16)「恩は忘れませーん{笑}。」という《恩恵の表明》である。

### 3.4 依頼の場面に見る積極的言語行動

3.1 から 3.3 まで、配慮に関わる表現や対人配慮の言語行動について見てきたが、松田(2018a, 2018b)では、大分県内の3地点において、「申し出」後の申し出られた側の発話機能の配慮と積極性について、人口密度の低い「非都市部」ほど《代理の依頼》や《念押し》等の積極的な言語行動が多く観察される傾向にあることを指摘している。そこで、依頼の場面における依頼(A)側の積極的な言語行動についても比較してみることにする。機能的要素としては、2.5に示した「説得の話段」におけるコミュニケーション機能の「行動の促し」に列挙したものや、「対人配慮・念押しの話段」における《依頼の念押し》がそれに当たる。具体的な発話を見ながら比較してみたい。

#### 3.4.1 代替行動の提案・再度の依頼

表4のコミュニケーション機能の「行動の促し」を見ると、熊本市・男女と鹿児島・男以外の地点には、積極的にBに働きかける内容がある。(43)～(49)の発話の下線部分は、Bが受諾するためにAが働きかける発話である。

- (43) 踊りはさー、また行った人に習って、うん。{笑} また、習ってこー。 [踊りはさー、また行った人に習って、うん。{笑} また、習おう。] (鹿児島・女)《代替案の提出》
- (44) どぎゃ、わたしがZさんの、断ってやっけん。 [どう、わたしがZさんの用事を、断ってあげるから。] (人吉市・女)《相手予定変更の提案》
- (45) そやけん、あんだ、ま、グランド・golfer、あんだ、んー、まあ、あんだが行かんと困るじゃろうけど、なんとかしちくれんかなー。 [そうだからね、あんだ、ま、グランド・golfer、あんだ、うん、まあ、あんだが行かないと困るだらうけど、何とかしてくれないかなあ。] (大分・女)《相手予定変更の希望》
- (46) うんうん、ほな代わってもろーて。 [うんうん、それなら代わってもらって。] (大分・女)《相手予定変更の依頼》
- (47) まあ、頼むわ。(大分・男)《代理の再依頼》
- (48) ね、{笑} そぎゃん言わんで出てよー。 [ね、{笑} そんなふうには言わないうで出てよー。] (熊本市・男)《代理の再依頼》
- (49) うん。お願いしまーす。 (人吉市・女)《代理の再依頼》



(43)～(46)は、依頼を引き受ける際に障害となるBの用事を変更させて、Aの依頼に応じるよう働きかけている。(43)は婦人部の踊りの稽古を、(44)ではZさんの氏子会を、(45)と(46)ではグランド・ゴルフの試合を、欠席させようとしての提案や依頼である。熊本市を除く地域の女性に観察されるので、このような積極性の示し方に性別が関係する可能性もある。(47)と(49)は「説得の話段」の中で発話されたものだが、(48)は次の「受諾の話段」の中に位置する。すでにBが受諾の発話に入っていたが、Bの語り始めが消極的な内容<sup>3</sup>であったために、Bの発言を「断り」と予測してしまい、受諾してもらうためにもう一押しをしたものと考えられる。このことについては、4.1で再び取り上げる。

### 3.4.2 依頼の念押し

Bの受諾後に、Aの《依頼の念押し》が全地点で観察される。(50)～(62)の具体的な発話を見ながら地域差を考えたい。

- (50) んなー、悪いけどー、頼むわ。(大分・男)《恐縮の表明》《依頼の念押し》  
 (51) ほんなー、お願いします。頼むでー。(大分・男)《依頼の念押し》《依頼の念押し》  
 (52) あの、代わりに、あの一、出てもらって、あんた行っちくれよー。(大分・女)《依頼の念押し》  
 (53) ほんな頼むー。(大分・女)《依頼の念押し》  
 (54) はい、お願いしますよ。(大分・女)《依頼の念押し》  
 (55) 一つよろしく頼んまーす。(熊本市・男)《依頼の念押し》  
 (56) どうぞよろしくー。(熊本市・男)《依頼の念押し》  
 (57) よろしくお願いします。(熊本市・女)《依頼の念押し》  
 (58) いたとってくれー、朝のうちだけ。(人吉市・男)《依頼の念押し》  
 (59) お願いしまーす。(人吉市・女)《依頼の念押し》  
 (60) はい、お願いしまーす。(人吉市・女)《依頼の念押し》  
 (61) よろしくお願いしまーす。(鹿児島・男)《依頼の念押し》  
 (62) そしたらお願いしますー。(鹿児島・女)《依頼の念押し》

念押しの言語形式は、「お願いします」が多いが、「頼む」「行っちくれ」「いたとってくれー」等、動詞を用いたより直接的といえる表現が大分・男女と人吉市・男に見られる点特徴的である。

## 4. 依頼談話の特徴から見る九州4地点の談話特徴の分布

### 4.1 配慮的特徴と積極的特徴の違い

ここまで、九州の4地点の談話の特徴を見てきたが、ここからは各地点をそれぞれの地域の代

<sup>3</sup>「ま、だ、あなたの代理ちゅうこつであるど、ちょっとねー、ちょっとー、あんまりね、気持ちが進まんけど。」というBの発話を指す。

表と見なして、依頼談話にどのような地域差があるのかに焦点を当てる。本稿で扱うのは非常に限られたデータ量ではあるものの、年代・性・ロールプレイ等の調査条件の均質性はかなり高いので、調査で得られた差異は同年代・同性同士の談話特徴をとらえていると考えてよいと思われる。

地域差を測る基準として、「配慮的特徴」と「積極的特徴」を使用する。これらは、前節までに示した例で、地域差がある程度認められているものである。先に取り上げた「配慮的特徴」とは、丁寧語の使用、依頼表現中の受益表現、《恐縮の表明》等の配慮の言語行動、《依頼の念押し》での定型表現（「お願いします」）使用である。定型表現の使用について、西尾（2012）では、都市性が高いほど定型表現が使われやすく、しかも男性と若い世代は都市部的と述べられている。3.3で述べたように熊本市・男と鹿児島・男には、「申し訳ない」「すみません」等の定型表現が使われる傾向がある。熊本市・女と鹿児島・女は「ごめんね」が多い。3.4.2でも人吉市・男以外は、「お願いします」や「どうぞよろしく」等の定型表現使用がある。

表5は「配慮的特徴」を比較するために、各地点の丁寧語の使用、依頼表現中の受益表現、《恐縮の表明》等の配慮の言語行動、《依頼の念押し》での定型表現の4つの特徴を一覧にしたものである。◎は度数2以上の出現があったことを示す。

表5の人吉市・男は、「どうもー」1例であるために、これまで《謝辞》としてきたが、「どうもすみません」もあるため、《謝辞》とは言い切れない。同様の発話位置で、他の地点ではすべて《恐縮の表明》になることから、《恐縮の表明》の可能性もあると考え、△で示した。表5で○や◎が多くつければ、多種類の言語的な配慮を行っていることになる。熊本市・女が種類も度数も多く、次に鹿児島・女、鹿児島・男、熊本市・男、人吉市・女と続く。大分は男女とも種類が少ない。最も少ないのは、人吉市・男である。

表5 依頼談話の配慮的特徴から見る九州4地点の比較（◎は度数2以上）

主要部	大分		熊本市		人吉市		鹿児島	
	男	女	男	女	男	女	男	女
丁寧語の使用				○		○	○	○
依頼表現中の受益表現	○	○	○	◎		○		○
配慮の言語行動《恐縮の表明》	○	◎	◎	◎	△		◎	◎
《依頼の念押し》での定型表現使用	○	○	◎	○		◎	○	○

次に、依頼に対する積極性の度合いを比較するために、Bの代替行動の提案や再度の依頼をしたかどうか、また、「受諾の話段」以降に依頼の念押しを何度もしたかどうかの2つの特徴を表6に示した。

表6の「代替行動の提案・再度の依頼」の行にある◎は、機能的要素の種類あるいは度数が2以上であることを示す。表6の熊本市・男の△は（48）を指しており、「説得の話段」内ではなく、すでにBの「受諾の話段」中であり、受諾の発話を始めていたBの発話に重なってしまっている。そのため、不十分な機能的要素であったと考えて△とした。○や◎が多くついた地点は、

表6 依頼談話の積極的特徴から見る九州4地点の比較 (◎は度数2以上)

主要部	大分		熊本市		人吉市		鹿児島	
	男	女	男	女	男	女	男	女
代替行動の提案・再度の依頼	◎	◎	△		◎	◎		◎
依頼の念押し	◎	◎	◎	○	○	◎	○	○

大分・男女と人吉市・女である。これらの地点は、表4の「行動の促し」に要素が多い地点でもあり、依頼に対する積極性の度合いが比較的高いといえる。逆に熊本市・女と鹿児島・男は、表4の「行動の促し」の要素が見られないことから、積極性の度合いが比較的低いといえる。

表5と表6を比べると、熊本市・男女と鹿児島・男女は配慮表現や配慮の言語行動について活発で(表5)、積極的言語行動については不活発(表6)、大分・男女と人吉市・男女は配慮表現や配慮の言語活動については不活発で(表5)、積極的言語行動については活発(表6)である。以上をまとめると、配慮の度合いの高さと積極性の度合いの高さは反比例していると考えられる。

配慮的特徴と積極的特徴の2つの特徴で本研究の対象地域がきれいに2分されるわけではないが、およそ熊本市と鹿児島のグループと大分と人吉市のグループに分けることができ、それぞれの特徴として、対人配慮に関する表現や言語行動が活発な「配慮型」と依頼の働きかけが活発な「積極型」といえそうである。そうだとすれば、グループが分かれる理由は何だろうか。何を起因として、このような談話特徴の違いが出ているのだろうか。

#### 4.2 依頼談話の特徴と都市性

今回明らかになった談話特徴の違いが、九州地方内の敬語発達地域と未発達地域の違いと重なるものではないことは明らかである。これまで、九州方言の敬語の特徴は、大きく東西に分けられることが指摘されてきた。中井(2017)は、待遇表現に関する全国方言地図(FPJD)<sup>4</sup>を作成し、九州地方の西側では敬語形式の種類が多く、敬語のしくみが複雑で発達しており、東側は敬語形式の種類が少なく、そのしくみが簡素で未発達であることを指摘している。これを前節の結果と比較すると、方言敬語発達地域である熊本市・男女、鹿児島・男女は、確かに依頼談話の配慮表現や配慮の言語行動、そして定型表現使用が活発であるという特徴が見出せるが、同じ方言敬語発達地域である人吉市・男女は異なる特徴を示している。熊本市・鹿児島というまとまりと大分・人吉市のまとまりの特徴としてまず想起されるのは、都市性の高低である(2.1の表1参照)。都市性とは、県庁所在地であるか否か、人口密度が高いか低いか、交通機関の中核地であるか否か等で測られる。1.1.2で述べた西尾(2012)では、以下のように「都市性の規定基準」を設定している。

<sup>4</sup> 大西(編)(2016)の地図138-147を指す。中井精一氏作成。神部(1992: 237-299)によれば、九州地方の敬語形式は多様ではあるものの、独特なものではなく、古態が生き残り、使い分けられている状態であるという。

## 「都市性高」の基準

- A. 居住市町村の人口規模が100万人以上。
- B. 自宅から徒歩10分圏内に地下鉄の駅がある。
- C. 自宅から徒歩10分圏内にデパートがある。

## 「都市性低」の基準

- A. 居住市町村の人口規模が5万人以下。
- B. 自宅から徒歩10分圏内に店無し。

(西尾 2012: 82)

西尾(2012)では、数量化Ⅲ類の手法を用い、都市性の高いことと人々のコミュニティ密度が低いこと、その逆に都市性が低いことと密度が高いこととの関係が深く、それぞれの組み合わせが成り立つ地域を「都市部」と「非都市部」と呼ぶとしている。そして、「都市部」では定型表現が多用され、逆の「非都市部」では定型表現が少ないと述べている<sup>5</sup>。本稿の結果からも、熊本市と鹿児島には「都市部」の談話の特徴があらわれ、大分と人吉市には「非都市部」の談話の特徴があらわれていると考えられる。今回扱っているのは九州の一部に過ぎず、これをもって証明できたとすることはできないが、談話の特徴で九州方言の分布を考える場合にも都市性という尺度は重要であることを示すものである。

本稿で扱った資料中に福岡県、佐賀県、長崎県、宮崎県の調査地がないので、代わりに日本放送協会編(1966)の中の「あいさつ」にある、「朝・夕」の場面で借り物<sup>6</sup>をしたり返したりする会話を見てみたい。依頼談話に相当するものとして、福岡県2地点、佐賀県1地点、長崎県2地点、宮崎県2地点の資料がある。それらの依頼に関わる言語行動を見てみると、以下のような発話が見つかった。調査地が「都市部」か「非都市部」かによって、違いがあることがうかがえる。

- ・福岡県福岡市博多で、借りた大八車を返しに来た場面に「ホンニ スンマツシェンジャツタバッテ [ほんとうにすみませんでした]。』とあるのに対して、「非都市部」の同県豊前市では、借りる場面での「タノムゾナー [頼むよ]。』という念押しのみである。
- ・佐賀県では「非都市部」の佐賀県東松浦郡有浦村のみだが、「オントキャ、オセワニナツテイコー [それでは、お世話になって行こう]。』が2度繰り返されている。
- ・長崎県北松浦郡中野村(現平戸市)では「シカタナカ タノムバナ [すまないけれども頼むよ]。』とあるのに対して、「非都市部」の同県南高来郡有家町では「ホンナ オタノミシヤス [それならおたのみいたします]。』という念押しのみである。
- ・宮崎県日南市飢肥町では「カシクダット イーケンドン [貸してくださるといいが]』という婉曲な表現なのに対して、「非都市部」の同県東臼杵郡南方村では「フンナラ カシクダハイヨ [それなら貸してくださいよ]。』という念押しのみである。

<sup>5</sup> 西尾(2012)では、落とした財布を届けに来てくれた隣人に対する言語行動を調べており、機能的要素の出現において、「都市部」と「非都市部」では「感謝表明」と「程度副詞」の出現率に有意差があったと述べている。定型的で語彙的な(複雑ではない)表現は「都市性が高く、近隣との人間関係が希薄な回答者」に選択されやすい。」とされている(西尾 2012: 82-83)。

<sup>6</sup> 借り物は八車だけでなく、鎌などの農機具等、収録ごとに異なる。

今回の結果と単純に比較することは難しいが、比較的「都市部」の地点では定型表現の使用や対人配慮の言語行動が活発といえそうである。それに対して、「非都市部」では依頼における積極的言語行動が活発といえそうであり、今回の結論とも合致していることを報告しておく。

#### 4.3 依頼談話の特徴の分布と九州の方言形成

九州4地点の依頼談話における特徴を比較した結果、比較的「都市部」といえそうな地点では定型表現の使用や対人配慮の言語行動が活発であり、それに対して、「非都市部」では依頼における積極的言語行動が活発であることが明らかになった。今回の結果と同様のことが残りの九州各県でも確認できるとしたら、九州の方言形成を考える上でどのような意味を持つだろうか。

先述のように、西尾(2012: 86)では、九州随一の都市である福岡市であっても、全国的には都市性が低く密着度が高いという結果が出ている。井上(編)(2014)の首都圏・女のデータを用いて同様の調査をしたところ、《恐縮の表明》は度数5で(すべて「悪い」)、念押しは度数1(「よろしくねー」)であった<sup>7</sup>。本稿の調査結果と単純に比較しても、首都圏・女は《恐縮の表明》の度数がずば抜けて多く、念押しの度数はきわめて少ないといえる。つまり、首都圏と比較すれば、九州は全体的に都市性が低いことになる。

本稿の結果と合わせて考えると、九州地方は全国的には自由度が高く、積極的な言語行動がなされている地域だといえることになる。

今回の結果は、依頼談話における「都市部」と「非都市部」の特徴の異なりであった。それは語彙の地理的伝播のような広がり方ではなく、その土台となる「働きかけに対する姿勢」の異なりを明らかにしたといえる。配慮表現に代表される定型的な表現に押し込められることのない「非都市部」は、自由で積極的な言語行動を活発に行うために、自律的な変化を生み出す活力を有することが示唆される。

#### 5. まとめと課題

九州4地点の高年層の依頼談話を比較した結果、熊本市・鹿児島(日置市)の配慮表現や配慮の言語行動や、定型表現が活発な「配慮型」と、大分(由布市)・人吉市の依頼や念押し等の積極的な言語行動が活発な「積極型」に特徴が分かれた。その要因には、都市性が強く関与していると考えられる。その根拠として、本稿で扱った資料から都市性の高い熊本市に「配慮型」が強くあられ、都市性の低い人吉市や大分には「積極型」が強くあられ、その中間である鹿児島には熊本市ほどではないが「配慮型」の特徴があらわれることを示した。

以上のことから、九州の「非都市部」は、働きかけに対して活発で自由なことばのやりとりを生み出す場であるといえ、言語改変の契機が生まれるしくみを示唆すると考えられる。

今回は限られた条件の中の、限られた地点数の結果である。しかしながら、条件を揃えて行われた貴重な資料を使っただけの比較結果であることも強調したい。今後は、九州の他県における同様

<sup>7</sup> 首都圏の男性の調査も行っているが、現在のところ公開されていない。



の調査を行うか、比較可能なスケールを考え出す等、多くのデータを分析していくことが必要だと考える。

## 参考文献

- 井上文子（編）（2014）『方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書』（共同研究報告 13-04）東京：国立国語研究所。
- 井上文子（2015）「2. 調査概要」井上文子・松田美香・酒井雅史・白坂千里「報告 第34回研究大会ワークショップ プロールプレイ会話による方言談話対照研究の試み—地域差・世代差・性差・メディア差に注目して—」『社会言語科学』17(2): 100-106. 東京：社会言語科学会。
- 大西拓一郎（編）（2016）『新日本言語地図』東京：朝倉書店。
- 沖裕子（1993）「談話からみた東の方言／西の方言」『月刊言語』22(9): 44-51.
- 沖裕子（2014）「方言にみる頼みかたの表現と発想」小林隆（編）『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』125-142. 東京：ひつじ書房。
- 神部宏泰（1992）「第五章 敬語の運用と史的展開」神部宏泰著『九州方言の表現論的研究』237-300. 大阪：和泉書院。
- 木部暢子（2014）「鹿児島方言の『イッ』と『イタッ』—テキストを使った方言研究の実践—」西日本国語国文学会『西日本国語国文学』1: 72-85.
- 久木田恵（1990）「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162: 90-100.
- 久木田恵（2010）「談話展開の地域差」小林隆・篠崎晃一（編）『方言の発見—知られざる地域差を知る』137-160. 東京：ひつじ書房。
- 熊谷智子（1997）「はたらきかけのやりとりとしての会話—特徴の東という形でみた『発話機能』—」茂呂雄二（編）『対話と知—談話の認知科学入門—』21-46. 東京：新曜社。
- 熊谷智子・篠崎晃一（2006）「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所（編）『言語行動における「配慮」の諸相』（国立国語研究所報告 123）19-54. 東京：くろしお出版。
- 小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』東京：岩波書店。
- ザトラウスキー（ポリリー・ザトラウスキー）（1993）『日本語の談話の構造分析』72-75. 東京：くろしお出版。
- 杉村孝夫（2013）「依頼の場面の談話分析—大分県方言談話資料による—」『福岡教育大学紀要』62(1): 33-54. 福岡：福岡教育大学。
- 中井精一（2017）「日本語敬語の多様性とその変化」大西拓一郎（編）『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』85-105. 東京：朝倉書店。
- 西尾純二（2012）「日本語の配慮言語行動の社会的多様性」三宅和子・野田尚史・生越直樹（編）『「配慮」はどのように示されるか』71-90. 東京：ひつじ書房。
- 日本放送協会（編）（1966）『全国方言資料』第六巻九州編. 東京：日本放送出版協会（本稿では、1999年のCD-ROM版を使用した。）
- 松田美香（2018a）「大分方言談話の地域差・世代差—申し出談話における配慮表現の地域差・世代差—」松田美香（編）『大分方言談話の配慮表現を中心とした地域差・世代差・性差の研究』, 科学研究費助成事業研究成果報告書。
- 松田美香（2018b）「大分方言談話に見るコミュニケーション力」小林隆（編）『コミュニケーションの方言学』153-178. 東京：ひつじ書房。
- 山岡政紀（2008）『発話機能論』東京：くろしお出版。

## 関連 Web サイト

方言ロールプレイ会話データベース <http://hougen-db.sakuraweb.com/rp/> (2020.04.10 閲覧)



## **A Study of Comparison in the Seniors' Discourses in the Scene of Request at Four Locations in Kyushu: Discourse Feature and Distribution about Consideration Express and Active Linguistic Behavior in Kyushu Dialect**

MATSUDA Mika

Beppu University / Project Collaborator, NINJAL

### **Abstract**

Fumiko Inoue (2014) compared and analyzed the discourse of seniors and young people in the Tokyo metropolitan area in a pair-replacement role-play conversation of four telephone scenes. The survey was conducted at several locations in Japan. In this study, I compared “the seniors’ discourses in the scene of request” at four locations in Kyushu. As a result, the discourse structure was as follows: Request by A → Refusal by B → Persuasion by A (→ Explanation of the circumstances by B → Persuasion by A) → Acceptance by B → Adjustment by A or B → Interpersonal consideration and Reminder of request by A. The discourse structure was found to be fairly common. Next, I compared the kinds of consideration expression A gives in “the paragraph of the request,” “the paragraph of the persuasion,” whether to make another suggestion, whether to re-request, and overall language behaviors such as care and reminders and the use of set phrase.

Results show that Kumamoto City and Kagoshima Prefecture (Hioki City and the other) is highly urbanized among the group: “Consideration” is dominant. In Oita Prefecture (Yufu City) and Hitoyoshi City, Kumamoto Prefecture, where urbanity is low, “Positiveness” is dominant. The distribution of features in “the seniors’ discourses in the scene of request” will likely be a key to elucidating the mechanism of spread, such as new dialect grammar phenomena originating in local areas.

**Keywords:** discourses in the scene of request, paragraph, urbanity, consideration, positiveness